

手がはなれる

日本語には身体を使った言葉が多くあります。『おもしろからだことば～体編』（石津ちひろ：文、大島妙子：絵、榊草土文化：発行）は、「胸、腹、方、手、尻、膝、腰、足」を使った表現が紹介されている絵本です。

「手がはなれる」のページには、「『子どもなどが成長して、ひとり立ちしていく』ってという意味もあるんだ」とあります。いま思いかえすと、幼子と手をつないで歩ける期間は短いものでした。手がかかる育児期間でもあり、子どもには「早くして」ばかり言っていたような気がします。小学生となれば自分のことは自分でできるようになります。いつの間にか手がかからなくなって、手をつなぐことが減っていることに気づいたとき、寂しさも感じますが、それでいいのです。いつまでも「手がはなれない」のは困ります。

大学生の課題を親が代行している例があります。Web入力であれば、「誰が書いたか（入力したか）」は分からないだろうと、親が率先して行っているのでしょう。しかし、内容を読めば「本人が書いたものではない」とすぐにわかります。

「子どもが親に頼る」というよりも、「親の言うことを素直にきく良い子」に育った子どもが、親がしたいことに従っているのだと思います。「親が、子どもの手をはなさない」でいるのでしょう。

「単位を取るには、課題提出を100パーセント行うことは最低限のこと。さらに良い成績にするには、良い内容のものを作って提出したほうがいい。それには子どもに任せていられない。親が代わりにやったとしても手書きではないから、分からないだろう」と考えて、親御さんが一生懸命大学の課題に取り組んでいるようです。

子どもはすでに大学生になっていますが、親からすると小学生のままなのでしょう。ランドセルを開け、宿題の有無を確認する。宿題をやらせるために、今日の授業はどんな内容だったのか聞き、子どもがモタモタしているようなら、親がササッと代わりに入力を済ませる。こんな状態なのではないかと想像します。

子どもを愛する気持ちはいつまでも離れませんが、子どもが自立するためには「手をはなす」必要があるでしょう。親が子どもの手をはなさないでいては、子ども自身が失敗を経験できません。「手がはなれて」良かったと思うには、親自身も「子どもの手をはなす」経験を積んでいくことが求められます。

人生にはいろいろなことがおきます。望まないできごとに遭遇してしまうかもしれませんが、乗り越えることも経験してほしいです。経験は自信にもつながります。子どもが経験できる機会を、親は奪わないようにしたいものです。

若者たちがみな、自分の可能性を信じて、あきらめない。そんな「腰がすわった人」になってほしい

と願います。「『腰がすわる』は、『どんなことがおこっても、びくもしないで、なにかをしつづける』って意味さ」とありました。